

基地の町に生きた「ハニーさん」たち

中

— 童心に刻まれた記憶を紙芝居に —

ノンフィクション作家 三山 喬

四十年近く前、つまり昭和期の終盤まで「キャンブ・ドレイク」という米軍基地があった埼玉県朝霞市。敗戦直後の日々、この街で各地から集まった街娼の「お姉さんたち」に囲まれて育った思い出を、令和の世に語り継ぐ高齢の紙芝居師がいる。

基地跡地への研究機運

朝霞の地で八十年余り生きてきた「金ちゃん」こと田中利夫という男性だ。その生家は戦後、朝霞駅前で貸し間を提供する「貸席屋」を営んでいた。小学生時代の彼はここに集う米兵相手の「ハニーさん」たちと家族同然の暮らしをし、恵まれない境遇を逞しく生き

るその姿を間近に見た（「ハニーさん」は「パンパン」という街娼への蔑称を嫌う田中独自の女性たちの呼び方）。今日の朝霞市は当時の十倍近い人が住むベッドタウンに変貌し、基地の街「だった痕跡はほとんど見当たらない。

すべてはもう忘却の彼方に消え去ったかに思えるが、田中の脳裏にはそれでも少年期の日常が鮮明に刻み込まれ、バタ臭い街の雰囲気や人々の生活をカラフルな絵で再現して見せる。老境に至ってそんな紙芝居を始めたのは「基地跡地の歴史研究会」、あるいはその前身の「基地跡地の歴史勉強会」という市民活動に加わってからのことだった。

最初につくられた「勉強会」の集まりは、基地返還

地の大半が自衛隊基地や各種公共施設になっていったあと、未利用地として数十年残された区域をどう土地利用するか、それを検討する一環として市役所都市整備課（現・みどり公園課）が立ち上げたものだった。

二〇〇八年ごろ始まったとされるその初期の活動は、あいにくもう「研究会」現代表の有永克司にも朝霞市担当課の職員にも、詳細はわからなくなってしまっている。当時はこの未利用地に国家公務員宿舎を建てる計画があり、その一角に「基地跡地の歴史」の展示コーナーを設ける前提で、住民自身による調査・研究が始まったとのことだった。その後、民主党政権下の事業仕分けにより宿舎建設は中止となり、展示コーナーのプランも消え去った。「勉強会」に集まった面々は、



金ちゃん、こと田中利夫

このため
会を趣味
的な「研
究会」に
切り替え
て現在に
至ってい
る。

「勉強会」時代の活動資料として、市役所が発行した「勉強会会報」というレターがある。二〇一三年に出たその第一号には、時系列で「これまでの活動報告」がまとめられ、そのトップに「二年七月にあった「報告会」の項目がある。

米軍基地周辺で暮らし、当時の様子をよく知る方へのヒアリング調査を通じて、短編映像「キャンブドレイクがあった頃」を作製しました（早稲田大学佐藤洋一教授の製作・監修）。

平成23（二〇一一）年7月に、映像の上映会を行うとともに、今後の歴史調査について意見交換会を行いました。

佐藤は都市史を専門とする早大大学院の研究者だ。当人の話では、この映像製作は、同じ早大の別の研究者の紹介で朝霞市から依頼を受け、取り組んだものだったという。基地ゆかりの人々のインタビューはあくまでも佐藤の研究室が単独で実施して、地元「勉強会」メンバーとは、映像作品の発表後に接点を持つ形だったらしい。